



「第5回 こども作文コンクール」の 表彰式を開催しました

2018年11月3日(土・祝)、東京・明治記念館にて、「第5回こども作文コンクール 感謝の心を、未来につなぐ。」(主催:読売新聞社、共催:あんしん財団、後援:文部科学省、公益社団法人日本PTA全国協議会)の表彰式が開催されました。

同日に開催された懇親会では、受賞者の子どもたちを対象に「^{する}駿がたけせんすじざいく 河竹千筋細工」をつくるキッズワークショップも実施されました。

「感謝の心を、
 未来につなぐ。」
 25の優秀作品を表彰!

あんしん財団が毎年共催している本コンクールは、「小学生の皆さんに、感謝の気持ちや夢をいつまでも忘れずに、未来へつなげてほしい」という思いから開催されています。

5回目となる今回は、日本全国から寄せられた6,784の応募作品の中から、25作品が選ばれました。題材は「こどもたちから、はたらく父・母へ、感謝の気持ち」または「あこがれの仕事、夢の仕事」のいずれかで、原稿用紙3枚以内の作文を書いてもらうものです。小学1~2年生の部・3~4年生の部・5~6年生の部の3部門に分かれて審査が行われ、それぞれの部門で大賞・優秀賞・読売新聞社賞・あんしん財団賞・日本PTA会長賞・佳作が授与されました(本誌7ページからは、受賞作品の一部





を掲載しています)。

表彰式には、全国の受賞者とその家族約80名が参加されました。厳かな雰囲気の中、受賞者にも家族にも、少し緊張しつつ誇らしげな笑顔が見られました。当法人の山岡徹朗理事長からの「受賞者の皆さん、おめでとうございます。今は少し緊張しているかもしれませんが、ぜひ今日の表彰式を楽しんで、一生の思い出にしてください」という開会の挨拶から始まり、それぞれの賞の担当プレゼンターから受賞者一人ひとりに賞状と記念品が手渡され、祝辞の言葉をいただきました。

あんしん財団賞のプレゼンターである理事長は「たくさんの作文の中から、ここにいる皆さんの作文が選ばれました。どれも本当にすばらしい作文

ばかりです。そんな作文を書いた小学生の皆さんと、そんな作文が書ける環境をつくってこれたお父様・お母様に、主催者側もとても勇気付けられました。ぜひ来年も応募していただきたいと思います」と、改めて受賞者と保護者に向けての祝辞を述べました。

子どもから親へ、 親から子どもへ 作文を通して伝わる感謝と夢

受賞者からは「表彰式は緊張したけれどとても誇らしい気持ちになった」、「作文を書くことは好きじゃなかったけれど、書いているうちにどんどん楽しくなってきた。お父さんとお母さんが喜んでくれたのが一番うれしい」友

だちも受賞したので、表彰式のために一緒に東京へ来ることができてうれしい」と、素直な感想が聞かれました。

保護者からも「作文を通して、子どもが普段感じていることを知る機会になった」「本を読んだりドラマを見ることが好きな子なので、知らない間に文章をつくる力がついたのかもしれない。将来がもっと楽しみになった」と、受賞を喜ぶと同時に、我が子の成長に感激する声が上がりました。

表彰式の後には、懇親会、キッズワークショップが行われました。その様子は6ページでご紹介しています。

7ページから
受賞作の一部を
掲載！



第5回こども作文コンクール 受賞者一覧

選考委員からのコメント



吉永みち子氏

ノンフィクション作家、コメンテーター。1985年『気がつけば騎手の女房』で第16回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。政府税制調査会、地方分権改革推進会議、郵政行政審議会、外務省を変える会などの委員を歴任。

作文を書くときに大切なのは、自分の気持ちを見つめ直すことだと思います。今回の「感謝」「夢」というテーマは、とても難しかったと思いますが、どの作品にも、それぞれの感謝の気持ちや夢への思いが的確な言葉で書き表されていました。大人になっても、自分の心の中を言葉で表すことの大切さを忘れないでほしいと思います。



田中ウルヴェ 京氏

メンタルトレーニング上級指導士、1988年ソウル五輪シンクロ・デュエット銅メダリスト。米国大学院修士号修得。国際オリンピック委員会(IOC)マーケティング委員。車いすバスケットボール男子日本代表・なでしこジャパンのメンタルコーチ。

たくさん悩んで書いてくれたのが伝わってきました。これからの人生でつらいことがあっても、あらゆることへの感謝の気持ちを忘れずに、たくさん悩んで、立ち向かっていってほしいと思います。私自身も子どもを持つ身なので、皆さんの作文を読んで、大変感激しました。受賞者の皆さん、保護者の皆さん、本当におめでとうございます。

大賞	●	若松 士高(わかまつ・しこう) 私立 神村学園初等部
	▲	茶珍 桜音(ちやちん・おと) 千葉市立扇田小学校
	◆	大内 渚音(おおうち・なほと) さいたま市立三室小学校
優秀賞	●	柴田 更紗(しばた・さらさ) 宮崎市立潮見小学校
	▲	浦田 寛翔(うらた・ちかた) 静岡市立久能小学校
	◆	伯耆田 響嬉(ほうきた・ひびき) 神戸市立根木内小学校
読売新聞社賞	●	吉田 有里(よしだ・ゆり) 国立北海道教育大学附属札幌小学校
	▲	讃岐 心乃(さぬき・ここの) 国立山口大学教育学部附属山口小学校
	◆	熊谷 遥希(くまがいはるき) 市川市立福栄小学校
あんしん財団賞	●	西岡 蓮(にしおか・れん) 私立 神村学園初等部
	▲	山田 煌真(やまだ・こうしん) 秋田市立桜小学校
	◆	丸山 百花(まるやま・ももか) 川崎市立梶ヶ谷小学校
日本PTA会長賞	●	田中 絢人(たなか・あやと) さいたま市立上小小学校
	▲	平田 蒼依(ひらた・あおい) 坂井市立春江東小学校
	◆	酒井 菜緒(さかい・なお) 石巻市立福井小学校

● 小学1～2年生の部、▲ 小学3～4年生の部、◆ 小学5～6年生の部

佳作	吉永 碧生(よしなが・あおい)	蓮見 珠生(はすみ・しゅう)
	岩田 心響(いわた・ここね)	安田 悠真(やすだ・ゆうしん)
	佐藤 菜歩(さとう・まほ)	永野 源(ながの・げん)
	徳岡 泰志(とくおか・たいし)	矢敷 彩葉(やしき・あやか)
	佐伯 結以(さえき・ゆい)	加藤 いろは(かとう・いろは)

表彰式と同日開催！

キッズワークショップ

するがたけせんすじざいく

駿河竹千筋細工で

盛りかごをつくらう！



使うほどに味が出る 「竹細工」づくりを体験

あんしん財団では、社会貢献活動の一つとして、中小企業の技を子どもたちに伝えていくキッズワークショップ「ワザ伝プロジェクト」を全国各地で実施しています。今回は、静岡竹工芸協同組合の杉山茂晴氏と神谷恵美氏を講師にお招きし、表彰式後の懇親会会場で、受賞者の子どもたちを対象に「駿河竹千筋細工」のモノづくり体験を行いました。あんしん財団の山岡理事長からは「今回の受賞作の中にも、『家業を継ぎたい』と書いた作文がありました。今日来ていただいた職人さんも、お父さん、おじいさん、そのまたおじいさんと、昔からの技術を受け継いでこられた方です」と説明がありました。

「駿河竹千筋細工」は、静岡県の伝統工芸品の一つ。元々は虫かごや鳥かご

として使うためにつくられたものなので、角のない“丸ひご”を使うのが特徴です。子どもたちは、簡単なクイズで駿河竹千筋細工について学んだあと、実際に盛りかごづくりに取り組みました。上級生は真剣な表情で手際よく、下級生は保護者にサポートしてもらいながら、かごを完成させていきます。

キッズワークショップの最後は、杉山氏から「竹細工が味を増し、本当の意味で完成するのは、いま小学生の皆さんが高校生や社会人になる10年後です」と、子どもたちに向けて締めくくりの挨拶がありました。『つくってよかったな』と思える日がくるまで、今日の思い出としてとっておいてください』という言葉に聞き入っている様子から、表彰式とキッズワークショップが大切な思い出になったことが感じ取れました。



杉山氏のまわりに集まって、丸ひごのつくり方について説明を受ける子どもたち。初めて見る職人の手仕事に、どの子どもも目を輝かせて聞き入っていました。



(上右)表彰式では緊張していた様子の子も、懇親会ではリラックスした表情で、家族や友だち同士で談笑していました。(下)子どもどうして協力しながらキッズワークショップに取り組む姿も見られました。



盛りかごづくりは力も必要。保護者の手を借りて、丁寧に完成させます。



僕の作文が
かざられているよ！



大賞を受賞した3名は、壇上でのインタビューにも笑顔で答えていました。